

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

医学哲学医学倫理 (1995.10) 13号:52～60.

メディカルヒューマニティーズ教育の充実を模索して
—哲学・史学・文学統合教育への試案—

近藤 均

メデイカルヒューマニティーズ教育の充実を模索して ——哲学・史学・文学統合教育への試案——

近藤 均

はじめに 現状認識から改革案の提示へ

一九九一年における大学設置基準の一部改正（いわゆる大綱化）により、従来の一般教育科目・専門科目などの区別が撤廃され、各大学が自由にカリキュラムを編成できるようになったが、この措置は、とくに医療系大学の場合、いわゆる教養教育の軽視という方向に拍車をかけた。とりわけ哲学・史学など人文系教養科目は、いまや存亡の危機に瀕している。第九四回日本医史学会総会（九三年五月・於金沢大学）でのシンポジウムは「医学教育における医史学のあり方と使命」であった。また、日本医学哲学・倫理学会第一二回大会（九三年一〇月・於産業医科大学）でのシンポジウムは「医学教育における哲学の在り方」であった。哲学・史学両分野のバラレルな学会で同様なテーマをめぐって真剣な討論がなされた背景には、当然ながら関係者の強い危機意識があった。

しかし、反面、危機だからこそ、努力次第では、その危

機感をバネに、むしろ教養教育をいつそう充実させる方向に転化することもできるのではないか。その方策を具体的に提示するのが本稿の課題である。そもそも、大学における教養教育は、一般市民を対象とする教養講座などとは異なり、専門教科の学習へのモチベーションを高めるものでなければならぬはずである。そうするためには、学生や専門科目担当教員のニーズや興味・関心を十分踏まえ、それに応える努力が必要であるが、従来はその努力が不足していたようにも見受けられる。歴史的経緯をみてみよう。

一、医療系大学における教養教育の変容

医療系大学の最近二〇年ほどの教養教育の実情を振り返るために、日本医学教育学会誌『医学教育』の論調の変化をみてみよう。同学会が設立されたのは一九六九年であるが、七〇年代後半までは、教養課程は専門課程とは独立した課程であるべきか、専門課程の内容と有機的関連をもた

せるべきかさえ、意見が一致していなかった。七九年の段階でもなお、教養課程は「医学と直接関連をもつ必要ももたせる必要もなく、むしろそれ以前の、知的人間の熟成のための栄養ともいべきもの」^①などとする意見が強かった。この種の発言はどれも抽象的で教育ビジョンに乏しく、まして教育技法などは追究されず、教師の興味・関心を一方的に学生に押しつけているだけであつたといつてよい。しかし、同じ頃、既に学生・専門課程教員双方から、教養課程はニーズに応えていないから期間を短縮すべしとの意見が多く出るに及んで、教養課程は専門課程との有機的関連を重視する方向へ徐々に傾いてきた。

八〇年代にはいると、その線に沿つてやや具体的な提言が現れた。八三年、産業医大の土屋健三郎学長は、今後ますます重要になるはずの人文社会科学が医療系大学では形骸化していると、現状を慨嘆された。しかし、その解決策は、授業時間数の増加に求めるのではなく、人文社会科学担当教員がもっと医学的素養や知識を身につけるべきことと、総合人間学のようなカリキュラムを開発することにより求められた。端的に言えば、担当教員の意識改革と人文社会科学の総合的統一の提言である。^②

八〇年代も後半になると、提言もより具体的になり、八七年には、総合的カリキュラムとしての「医学的一般教育」

が提唱され、カリキュラム案が提示され始めた。^③しかしこの時点ではまだ自然科学のみの素案であつて、人文社会科学に関しては、少なくとも『医学教育』誌上では、今日に至るも具体的な提言はほとんど出ていない。それどころか、九〇年代に大綱化を迎えて、人文社会科学はまさに瀕死の状態である。

こうして『医学教育』誌の論調の変化をみていくと、徐々にではあるが、学会の趨勢としては、専門教育を踏まえたうえで教養教育にすべしという意識が高まつてきた。一部には、いまだにリベラル・アーツを強調する傾向もあるが、終戦直後ならいざ知らず、今日、とくに都市部では、廉価な教養書・教養雑誌が巷にあふれ、テレビ・ラジオのいわゆる教養番組や放送大学・各種カルチャースクールが大盛況である以上、もはや、敢えて大学の場でリベラル・アーツ教育を行なう意義は乏しいであろう。専門教育を踏まえたうえで教養教育という方向性には、もはや疑いの余地はない。問題は、いかにして医療系大学とりわけ医学部における瀕死の人文系教養教育を、学生が学習意欲をもちうるようなかたちで蘇生させ、さらなる飛躍を期すか、である。いささか遅きに失した観もあるが、いまこそ解決策を具体的に示すときである。僭越ながら筆者は、自らの教育実践を踏まえつつ、ここに、ささやかな改革案を提示さ

せて戴く。これは端的に言えば、人文系教養教育の三本柱である哲学・史学・文学の統合教育試案である。提案に先立って、学生にこれら三分野を学ばせる意義を、有識者の提言を引用しつつ明確にしておこう。

二、医療系大学における人文系教養教育の意義

① 哲学（医療哲学）

前述の本学会シンポジウムにおいて、旭川医大の岡田雅勝教授は、長年の教育体験を踏まえて説得力ある提言をされた。すなわち、従来の西洋哲学受け売り教育やリベラル・アーツ型遊び教育を反省し、日本の現状に立脚し医療従事者養成にそつた哲学教育を進めること。また、「現代の状況を適切に捉え、若者たちの理解可能な素材を取り扱い、それらに哲学的な問題を感じとる力を引き出すようにし、若者たちの思考力を彼らの現実の生活そのものに向けさせる」こと、である。そのための具体的な素材としては、脳死・臓器移植・植物人間・体外受精・人間実験など先端医療が産み出したさまざまな問題を挙げられている。そして、「西洋型の一辺倒のテキストに固執することなく、現代の文化や現代の先端医療技術が生み出したさまざまな問題をも十分に包摂するようなテキストづくり」が急務である

旨を指摘されている。^④この方向性には筆者も全面的に賛成である。

② 史学（医療史）

前述の日本医史学会総会シンポにおいて、弘前大の松木明知教授は、医学（医療）史教育の意義を極めて明快に次の五点に要約しておられる。^⑤①医学の歴史つまり流れを知ることが、われわれが現在行っている医学・医療に対するより深い理解に役立つ。②医学の歴史を理解することによって現代の医療に対する「病識」を持つことができる。つまりより良い医学・医療の方向を把握できる。③歴史つまり過去の情報を精査することによって新しいアイデアや新しい概念を創造し提唱することが可能である。④史的研究を通じて史的資料やその他の文献に対する読み方がより深まる。⑤正確な記録を残すことの重要性を認識できる。

筆者も医史学研究者であり、医学（医療）史教育の重要性は大いに力説したいが、残念ながら実際に医学（医療）史教育をカリキュラムに組み込んでいる大学は極めて少ない。^⑥

③ 文学（医療文学）

情操教育の一環としての文学教育の重要性を否定する者

はいないであろう。とりわけ患者に接する場面で豊かな人間性が要求される医療従事者にとっては、文学は大切な教養である。かつての医療系大学での教員・学生へのアンケート調査では、文学の必要性については低い理解しか得られていなかったし、^①医療系大学の文学担当者からの積極的な発言もほとんど聞かれないが、哲学担当者でありながら、かねてから文学教育も積極的に推進してこられたのが平山正実教授である。同教授の自治医大での実践の報告を引用すると、「小説には、医療や医学をテーマとするものが数多くある。欧米では医療関係者の卒前・卒後教育のカリキュラムの中で『医療と文学』という項目が組み入れられているところもあると聞く。日本においても、医学教育の中にもっと、医療や医学をテーマとする文学作品を読み討議し合うといったカリキュラムを導入することを考えてみるのもよいのではないだろうか」^②。前述の本学会シンポジウムでも同教授は、理想の医師像の原型を一〇項目提示されたあと、そういう医師の養成策の一つとして、文学・闘病記・医療に関するルポルタージュなど、広義の文学書の活用を力説された。^③筆者も全く同感である。

三、哲学・史学・文学統合教育への試案

以上のように医療哲学・医療史および医療文学（医療に関連した文学作品の講読）の学習が、それぞれに意義深いことは疑いの余地がない。とはいえ、医科学や医療技術の高度化・複雑化に伴い、専門教育の時間確保のために教養教育の絶対時間が減少していかざるを得ないのは時代の趨勢であろうから、今後は、限られた時間でいかに効率的な教養教育を進めるかを考えることが大切である。そのためには、教養科目と専門科目との、いわば縦の関係での統合を推進することから、さらに一歩進めて、たとえば哲学と史学など、教養科目どうしの、いわば横の関係での統合も積極的に推進する必要がある。

筆者はかねてから、少なくとも医療系の学生に対しては、哲学・史学・文学は統合教育にすべきだと考えてきた。医療問題を核にして、これら三領域をメディアカルヒューマニティーズ（敢えて訳せば医療人間学）の名のもとに有機的に統合するわけである。しかも、それを専門科目から遊離した授業にしないためには、明治初年の近代的医制確立以降の歴史を十分踏まえつつ、現代日本の医療状況を正面から見据えた内容となるよう心掛けるべきであろう。とはいえ、史的な講義はともすると細かい史実の羅列に終始しがちであり、他方、哲学的な講義は、とかく抽象的・観念的になりがちで、いずれも学生の意欲・興味を減退させかねず、

ひいては、出席率の低下や授業中の私語を招きかねない。

こうした弊害を避けるために、筆者は、文学を中核に据えて授業を進めることを提唱したい。すなわち、森鷗外・夏目漱石・芥川龍之介をはじめ島崎藤村・谷崎潤一郎・太宰治など、既に定評のある作家の作品から、医療現場を舞台とするもの、患者・看護婦・医師などを主人公とするもの、病気そのものを主題とするものなどを精選し、その鑑賞を通じて豊かな人間性の涵養をはかる（医療文学）とともに、作品の社会的背景などに関する史的洞察力を養い（医療史）、さらに、そこから現代にも通じる医療問題を汲み取って哲学的に吟味させて批判的精神を養い（医療哲学）、ひいては学生自身の将来展望をも開かせるわけである。適度に医学・医療上の専門用語が出てくる作品なら、学生の知的好奇心をもいっそう満足させ、ひいては専門科目の学習意欲も高まるであろう。

学生の文学書離れが嘆かれて久しい。とくに実学志向の学生には、もともと体質的に文学を毛嫌いしている者も多い。しかし、文学書離れの最大の要因は、じつは、教師の側に、個々の学生ごとに興味のもてそうな適当な本を紹介する力量が欠けているからではないか。適切な指導さえあれば学生は必ず興味を抱く。逆に、文学好きな学生でも、本の選択を彼らの意思に任せておくと、山崎豊子『白い巨

塔』や遠藤周作『海と毒薬』などのきわものや、いまだ評価の定まっていない現代の流行作家の作品に関心が傾きがちである。学生にはまず何よりも、鷗外・漱石・芥川をはじめとする、既に評価の定まった著名作家の作品を読ませるべきであろう。そう指導してこそ、「教養」担当教員の面目も躍如となるろう。

論より証拠である。以下、具体的な文学作品に即して、筆者が理想とする、医療系大学における人文系教養教育の一端を述べたい。

四、活用すべき文学作品の実例

① 横光利一作『花園の思想』（昭和二年）

これは、肺結核にかかってサナトリウムでの長期療養の果てに死期が迫ってきた妻の姿と、彼女を励まし、最期を看取る夫の姿、さらに、夫婦の心の交流を、夫の視線から描いた作品で、横光自身の実体験が下敷きになっている。専門用語は、カンフル、リングル、酸素吸入器、法医学など極僅かであるが、ターミナルケア、QOL、安楽死・尊厳死の是非などについて思索を深める格好の教材である。また、感染を恐れる周辺住民のサナトリウムへの嫌がらせに、現代におけるエイズ患者への差別なども重なって見え

る。

② 佐藤春夫作「陳述」(昭和四年)

舞台はある大学病院の医局である。卒後四年の学究肌の医局員の当直の夜、入院患者が虫様突起炎から穿孔性腹膜炎を併発する。緊急に開腹手術に取り掛かるが、緊張のあまり腹壁切開用の円刃刀と直尖鉗を取り違える。それを日頃から不仲のベテラン看護婦長になじられた瞬間、鬱積していた感情が一気に爆発して婦長に刃傷に及ぶ。副題に「被告」ノ瀬医学士陳述の一部」とあるように、これは刑事被告人となった医局員に対する供述調書という形に仕立てられた中編小説である。人間関係が未熟な若者が多くなつたといわれる昨今、医療スタッフ間の人間関係のあり方にかんして思索するには格好の教材である。

専門用語としては、人工流産、抓把術、輸尿管、臍帯、卵巣、大脳皮質、瞳孔、角膜など、おもに解剖学・生理学・病理学に関連したものが頻出する。

③ 川端康成作「川のある下町の話」(昭和二八年)

主人公のインターン生が、国家試験までの数カ月間、大学病院で研修を受けつつ医師の卵として成長していく姿を描いた長篇小説である。主人公に、誰からも愛される医師

の理想像が見て取れる。生活保護制度の実態など当時の福祉の立ち遅れも読み取れる。「狭くて瘦せた土地に、人ばかりふえる日本で、老人の寿命が延びるといふのも、国の悩みを増すかもしれない」という、既に今日の高齢化社会を予見しているかのような医師の発言。「医者が理想に向かつて戦うほど、病気の数はふえる」という同じ医師の無力感。抗生物質の発見の一方で米ソ冷戦構造が深刻化していくなか、「新薬で生かされる人と、原子爆弾で殺される人と、どちらが多いんでしょう」という、インターン生の漠然とした不安。登場人物のこれらの言葉は、読者が深い哲学的思索を展開するきっかけとなる。

専門用語は、ビタカンフル、血沈試験、ファン氏試験、胸部捻髪音、ペニシリン、ズルファ・ピリジン、チアノオゼ、オウレオ・マイシン、脳下垂体前葉ホルモンなど、枚挙に暇がない。

④ その他

ほかにも有用な作品は枚挙に暇がないが、紙数の関係から、**①**国木田独歩「春の鳥」(明治三七年)、**②**田山花袋「一兵卒」(明治四〇年)、**③**志賀直哉「流行感冒」(大正八年)、**④**梶井基次郎「のんきな患者」(昭和七年)について簡単にふれるにとどめよう。

①は知的障害児（精神薄弱児・精神発達遅滞児）への教育を主題にした短篇であり、彼らのQOLや幸・不幸、ひいては福祉のあり方について考えさせるきっかけにならう。医療・福祉施設の見学などECEの準備に最適な教材である。また、いわゆる差別用語と表現の自由の関係についても考えさせる作品でもある。

②は、日露戦争に従軍した一兵卒が脚気にかかって死ぬまでを描いた短篇であり、病状の描写がリアルである。他のビタミン欠乏症とも関連づけければ、栄養学の講義にも活用が可能であり、現代では実感に乏しい栄養障害について理解する一助となる。

③は、大正中期に世界的に猛威をふるったいわゆるスペイン風邪を扱った短篇で、我が児への感染を恐れる若き父親の姿が私小説ふうに描かれている。乳児死亡率の統計資料なども同時に配布すれば、公衆衛生学の教材にもなる。

④は作者没年の短篇で、肺結核で死期を悟った作者自身の心理が如実にうかがえる。結核死亡者数や平均寿命の年次別推移の統計表と絡めれば、公衆衛生学の教材にもなる。まだ特効薬がない時代の、迷信的療法にすがらざるを得ない庶民の哀感も伝わってくる。

ほかにも、教材として活用できる作品は枚挙に暇がない。目下、代表的な作家五〇人に及ぶ詳しいリストを作成中

あり、その公表は別稿にゆずる。

筆者は一九九三年から、順天堂大医学部専門課程での医史学ゼミや同医療短大看護学科での医療史講義において上記の方法を実際に部分的に採用し、学生に概ね好評であった。九五年からは慶應義塾看護短大でも同様な試みをする予定である。筆者に与えられた授業枠は、たかだか医史学ゼミ・医療史講義・医療総論の一部（分担）に過ぎないので、理想をすべて実践するわけにはいかないが、いろいろ試行錯誤を重ねてきた。その実践報告・自己評価は別に論文として掲載される予定である。また、テキストに適當なものがないので、目下、鋭意製作中である。これらの内容についてもいずれ批判・叱正を賜りたい。

おわりに 今後のカリキュラム改革および本学会活動へ向けての提言

以上、医療系大学における人文系教養教育に関して、具体的なカリキュラム改革案を提示した。同様にして、社会科学系列でも、医療社会学・医療人類学・医療経済学・医療統計学などを統合して内容を精選すれば、一科目とすることができよう。それに、自然科学は、既定方針どおり専門科目との統合を積極的におし進めれば、ゆとり

も生まれよう。なお教養教育は、人格形成に資する意味からも、低学年のみでなく、短期集中型で各学年に配当すべきであると考え。また、時間がないからといって決して選択科目にすべきではない。統合・精選した重要事項を全員に必修として教示すべきであろう。人数が多過ぎるといふのなら、組分けして何回でも繰返せばよい。

最後に、今後の本学会活動についても提言させて戴く。筆者がかねてから知っていたのは、たてまえの教育論ではなく、医療系大学の教養科目担当者が、具体的にどういふ内容・技法で授業を進めておられるのか、ということである。交代で模擬授業をするか、あるいは実際に大学の現場で互いに授業参観をし忌憚なく批判し合う、といった程度にまで踏み込んだ学会活動が実現すれば、筆者のような若輩にはたいへん有難い。学生の評判や出席率はどうか、私語に悩まされていないか、試験・成績評価の方法は、など、実態を率直に話し合い、改善すべき点があれば、その解決策も探究し合うのである。このように、学者・研究者としてだけでなく教育者としても互いに自己をさらけ出して切磋琢磨し合う場を積極的に設けなければ、教養教育は、とりわけ医療系では、今後ますますジリ貧になっていくであろう。

〔順天堂大学医学部非常勤講師・医史学・医療総論〕

こんどう ひとし

注

- ① 小野寺壮吉ほか「医科大学における一般教育のあり方」『医学教育』一〇巻五号一九七九年
- ② 土屋健三郎「医学校における一般教育 人文社会科学について」『医学教育』一四巻四号一九八三年
- ③ 日本医学教育学会医学的一般教育ワーキンググループ「医科大学における統合カリキュラムとしての医学的一般教育の意義」『医学教育』一八巻五号一九八七年
- ④ 岡田雅勝「医学教育における哲学の在り方―哲学者の立場から(1)―」『医学哲学医学倫理』一二号一九九四年
- ⑤ 松木明知「医学教育における医史学の現状と将来のあり方」『日本医史学雑誌』三九巻一号一九九三年
- ⑥ 蔵方宏昌「医学史教育を模索して」『日本医史学雑誌』三九巻一号一九九三年
- ⑦ 日本医学教育学会学部教育委員会「教養(医進)課程に関するアンケート調査とその結果」『医学教育』一〇巻二号一九七九年

- ⑧ 平山正実「読書セミナーを用いた倫理教育の実践」『医学教育』二〇巻五号一九八九年
- ⑨ 平山正実「医学教育における哲学の在り方―医師の立場から―」『医学哲学医学倫理』一二号一九九四年
- ⑩ 伊藤博康「医学部進学課程学生の読書」『医学教育』一卷一号一九八〇年
- ⑪ 近藤 均「医学史・医療史教育に文学作品を活用する試み―実践報告と自己評価―」『順天堂医療短期大学紀要』七号一九九六年（近刊）